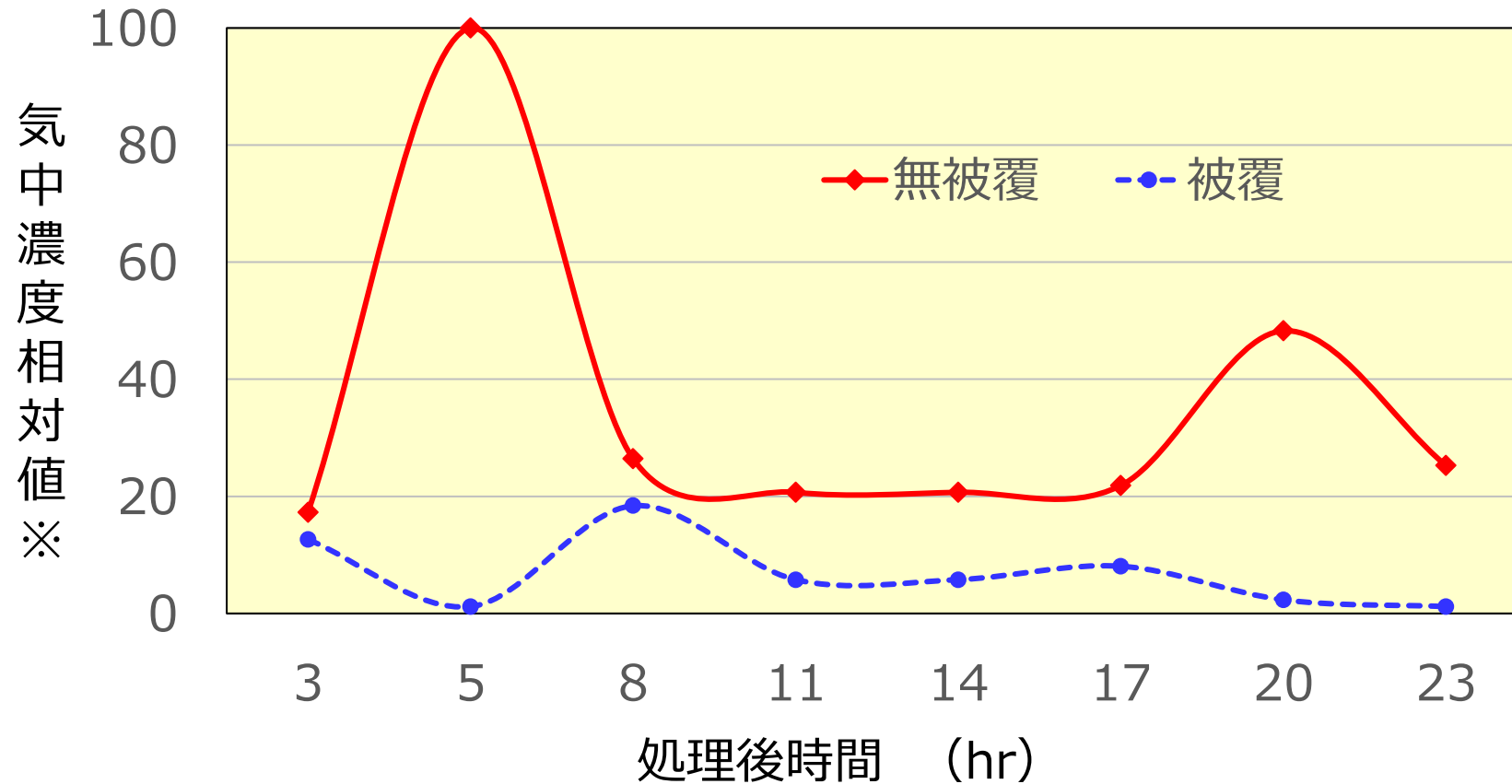


# 被覆によるクロルピクリンの揮散抑止の例

2022年2月  
クロルピクリン工業会



1992年 社団法人日本くん蒸技術協会による「クロルピクリン土壌くん蒸における環境調査」の結果より

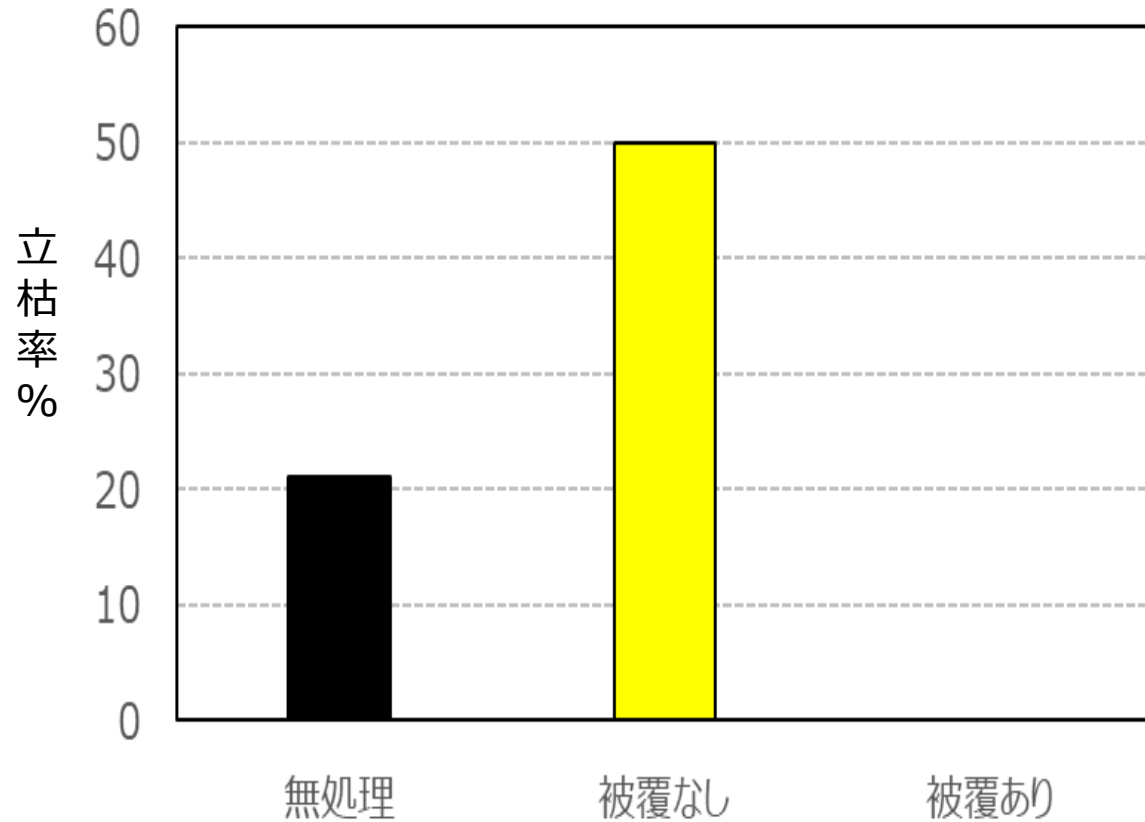
被覆厚：0.02mm、気中濃度：土壌（シート）表面近くの気中濃度

※縦軸は、無被覆の気中濃度最大値（処理5時間後）を100とした場合の気中濃度相対値

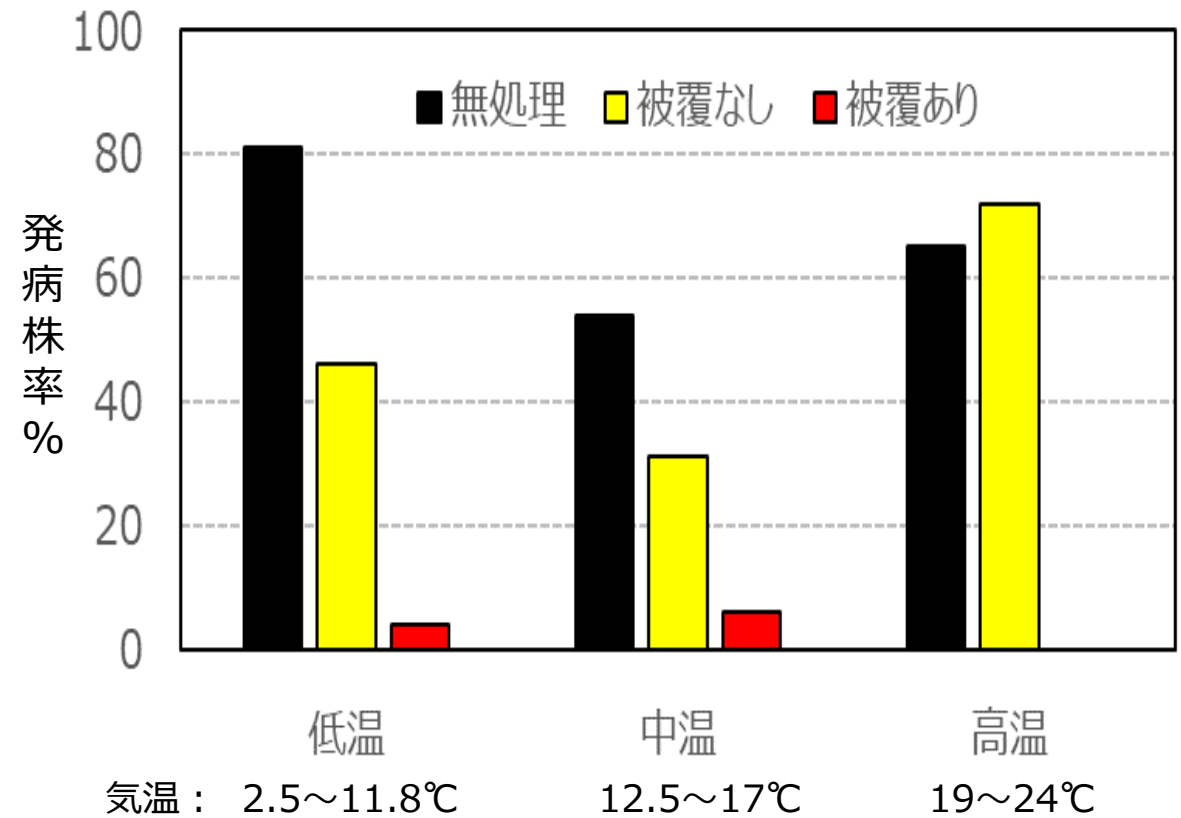
処理後に被覆をしないとクロルピクリンの大半が揮散してしまい、十分な効果が得られない恐れがあります。

# 被覆をすることでクロルピグリンの防除効果が向上した例

2022年2月  
クロルピグリン工業会



ビート 苗立枯病 (*Rhizoctonia*属菌) に対する効果  
(1956年、茨城県農業試験場)



きゅうり づる割病 (*Fusarium oxysporum*) に対する効果  
(1964年、東京農試研報3、P.52~63、阿部ら)

クロルピグリン処理後に被覆をすることで、病害に対する効果が安定することが確認されています。一方、無被覆では無処理と変わらない結果となる場合もあり、十分な効果を出すために被覆が必須であることが示唆されました。

# 被覆をすることでクローピクリンの病害防除範囲が拡大した例

無被覆		処理地点からの距離 (cm)						
地表からの距離		0	5	10	15	20	25	30
0~1cm			-	+	+	+	+	+
5cm	●							
10cm		-	-	-	-	-	+	+

被覆		処理地点からの距離 (cm)						
地表からの距離		0	5	10	15	20	25	30
0~1cm			-	-	-	-	-	-
5cm	●							
10cm		-	-	-	-	-	-	+

● : 99%液剤処理地点

- 白絹病 (*Sclerotium rolfsii*) がすべて死滅

+ 白絹病 (*Sclerotium rolfsii*) の一部もしくは全部が生存

茨城県農業試験場、1961年

処理後に被覆をしないと、クローピクリンが土壌中で十分に拡散しないことが示されました。